



## 幼児教育の「危機」

坂元彦太郎

### 一、

大都會その他の、すでに幼稚園が「飽和」している地域では、いわばかねやたいこで、園児を募集して歩き、はげしい争奪戦を演じたという、笑えない悲劇的なニュースもつたり、従来百パーセントに近い入園率をもっていた地域では園児数の変化からおこる組数の減少から、先生がやむをえず転退職をせざるをえないという、いたましい現実に直面した所もあるという。

しかも、このような事態に立ちいたった園の多くは、この数年入園志望者の激増によるうれしい悲鳴をあげていた所だけに、一層そのショックもはげしいものがあると、考えられる。まことに、これが幼稚園の重大な危機と感ぜられるのも

「幼稚園ブーム終る」といった、センセイショナルな見出しで、ジャーナリズムが騒いでくれたこの四月であった。たしかに全般的にいえばこの春は入園志望者が減少したようであり、特に大都會ではその現象が著しく現われたのは事実である。そして、一方には、このことがこのごろの幼稚園のやり方に不十分なものがあつたことの結果であるとの見解をとり、幼稚園教育そのものへの疑いを投げかける論者があるとともに、他方には、園児の減少が幼稚園の発展に全く暗雲を閉ざすものであるとして、その将来を悲観する関係者もあるようである。果して、こういう観察が当をえているだろうか、現在のこういう事態について、私なりの考えを以下述べて見たい。

無理ではなく、少くとも、現段階が重要な転換期に立っているのは事実なのであって、真剣な考慮や適切な対策が必要であるといわねばならない。

一方、全国的にいえば、今まで幼稚園が設立されていなかったり、非常に少なかったりしていた地方では、ぞくぞくと新しく園がつくられる動きが、むしろ強くなってきているのであって、この春といえども決して弱まってはいない。たしかに、幼児教育への理解が次第にいきわたつていって、幼稚園設置への要望が高まりつつある、と見るべきである。園の総数ははっきり増加しているだけでなく、園児の数さえ増している地方も、相当にあるのではないかと私は観測している。従来、入園希望者の一部しか収容できなかったのに、大部分の者の希望をいれることができ、それに連れて今までは入園を希望しなかった人々の子女までが入園を申し出るようなことまで起っている地方もある。

だから、こうした明るい方面から見ても、現在はたしかに、幼稚園にとっての重要な転換期であつて、慎重な考慮や真剣な覚悟を必要とする時期である、といえよう。

## 二、

戦争終了直後には、一時出生率がいちぢるしく高まり、幼稚園適齢の幼児が激増したのであつたが、「家族計画」の考えが一般に普及しだしたためか、出生率がしだいに減りはじ

め、それが現実には幼稚園の園児数に影響をはっきり見せだしたのが、昨昭和三十年からであつた。本年になると一層その傾向がよくなり、今後なおこの勢いがつづくものと予想されている。年々増加している小学校の児童数にしても、昭和三十三年を絶頂にして、しだいに、時には、はげしく減少していくものと予想されている。ある推計によると、昭和四十年までは、毎年毎年出生率が減りつづけていって、現在の半分以下になり、それからは大体保ち合いになる、というのである。一方、死亡率も低くなつてはきているが、とても、出生率と差引いて全幼児数では増減ないという程度には決してならない。その外に、実際の入園児の数の増減に影響を与える経済的な理由やその他幾多の原因があるわけではあるが、何しろ、幼児の絶対数の減少だけは、厳然と動かないものと、はっきり覚悟しなければならぬことである。他の理由が如何に好転しようとも、この減少をそつたやすくカヴァーできるとは考えられないのである。

いわゆる幼稚園ブームの終了の最大の原因は、まさしく以上のことが最大の原因であるとしなければならぬ。したがつて、このごろの幼児教育の方向ややり方がまちがつていたために、こんな結果になつたのだ、という見方は原則としては当たらないと私は固く信じている。すでに指摘したように、幼児教育に対する理解と信頼が少しずつながらひろまりつつあるという証、もあるのである。決して幼児教育の重要さをこ

れで疑ったり、幼稚園を不必要視したりしてはならない。

しかしながら、一部に伝えられていたようなべらぼうな数の園児を狭い施設につめこんで、営利的な企業としては成功していたような園がほんとうにあったとすれば、これはまさしく天の配剤であるとされても仕方はあるまい。少くとも、これからは幼稚園営業がもうかる商売でなくなるであろう。わざわざ割の合わないようにする必要はないが、このことを頭において園の運営に当るべきであり、さらに心からの幼児への愛情に基ずく教育的な配慮を第一義としていかねばならない。こう覚悟をはっきりとたてなおすときが来たのである。

あまりにも多く幼児をつめこまねばならなかったために、狭すぎた園舎や不足勝ちな設備にもややゆとりをとりもどし、手がとどきかねていた保育の実際にもできるだけの工夫と勢力をそそいで、一步でも理想に近い園の姿に近づくように努力するときがきたのである。いわば、量的に傾いていたものを、質的に深めるときとなったのである。先生方もまた、一層自己教養への努力をはらって、この時勢の移り変りに応ずる気がまえをもたねばなるまい。いいにくいことであるが、教師の方にも、質的な向上と淘汰たうたとが要求されることは必定である。

### 三、

しかしながら、このような、自己向上や自己反省するので

はないのである。園児が減少していくことをそれ自身にも、いろいろな工夫や対策があつてしかるべきであろう。

先ず、考えられるのは、例えば従来一年保育ばかりをやっていた地方や園では、二年保育をもはじめようという工夫や努力をつくすべきである、ということである。

幼稚園教育はまだ義務教育にはなっていないが、本質的に見て、できるだけ多くの幼児に、その教育を受ける機会をひらくべきであろう。少数の、めぐまれた幼児たちにだけ、すぐれた教育を与えるよりも、できるだけ広く、多くの幼児にそのめぐみに触れさせることの方が先である。だから、入園の希望者が激増し、園の施設や先生の数に比べてはちぎれるようになる場合には、全部を一年保育として、しかもできるだけ多くの幼児を收容する方がのぞましいと私は考える。それが一二年前までの状態であった。幼稚園教育が普及している地方ほど、そういう場合が多かったと考えられる。

ところが、いまや園児が減りはじめた。これを機会に、その教育をあらゆる点でりっぱにするように努力すると同時に、自分たちの園で收容可能な人数の中で、二年保育を開始するチャンスを作りひらくように努力すべきである。いたずらに園児数の減少を手をこまねいて宿命としてあきらめるのではなく、あらゆる工夫と努力をつくして、従来入園しなかった子どもたちを招きいれる上に、下の方に年限をのぼして、二年保育児を受け入れるようにしたい。そのために、最

も適切な時期や方法をよく研究して、周囲の人々に二年保育のもつ意義を理解させ、協力をかちうるように努力するときがきたのである。これは単に幼稚園にとつての利己的な自己防衛ではない。ほんとうに幼児教育を軌道にのせ、さらに向上させるための努力なのである。幼児教育を愛する者たち同志も相互に手をつないで、真剣な運動を起して経営者や設立者に対し、また父兄やその地域の人人々に対して、こういう形における幼児教育の進展への協力をかち取らねばならない。

すでに二年保育を行っている場合でも、その数を増加したり、さらに三年保育をはじめたりすることを考慮するときがきたのも、今まで述べてきた所と同様である。

私立の場合であるならば割に容易に右に述べたように転換することができらるであらう。(しかし、それを教育的にも経営的にもうまくやつてのけることには、多くの困難にうちかたねばならないのは、もちろんである。)ことに公立の幼稚園である場合には、市町村の当局者や教育委員たちに対する相当なはたらきかけを必要とする。園児数が減少したことをつかまえて、それと比例して、単に組数や教員数を減少するといふことを平気で行うことになりやすい。むろん設備や施設の状態に照して適当な園児数を越えていた場合にはやむをえないが、丁度適当である線を切るころから、その園児数を二年保育なり三年保育に切りかえるよう、はっきりと行動しなければならぬ。一たん、組数や教員数を減らされてからで

は、とても回復するのは困難になる。よく調査し研究して、できたら次年度、もしくはその次の年度から、一部の園児をこのように切り換えるよう、もう今から努力をはじめなければならぬ。これはたしかに重大な試練であり、なみ大いなことではこの運命的な重荷をはねかえすことはできないであらう。しかし、これを見事に切り抜けないようでは、ほんとに幼児を愛し、幼児教育に献身するとはいえないであらう。幼稚園の先生方には、最も不得手な方面であり(そしてこのことは決して幼稚園教師の不名誉ではなかった)いやな仕事であることはよく分るのであるが、そこを一つ考えなおし、決然として勇猛心をおこし、幼児への感情にもとずき、誠意をもって人々を動かすよう、起つていただかねばなるまい。でなければ、ある人々が悲觀的に予測するように、幼稚園がしだいに尻すばみになってゆくおそれが十分にあるのである。

まだこれから幼児教育を開拓する余地が十分にある所、現在でさえ入園希望者がふえている所でも、決して安かんとあぐらをかいていいわけではない。今から、幼児の教育を一層充実させ、地についた運営をするように努力していなければならぬ。何年か先におこるであらう園児の減少についても、十分対処できるような基礎をつくつておかねばならぬであらう。

#### 四、

この際、私が指摘しておきたい今一つの重要な点がある。それは、幼稚園がほとんど設置されていなかった地方に対するはたらきかけが、今こそ必要であり、そして、その適切な時期である、ということである。

未設置であっても、すでに幼児教育機関を何とかして設立しようという気運がうごきかけている地方では、今が設立へ踏み切るに一番いいときであることを、声を大にして運動したいものである。幼児数がおそろしく増加していたときは、園舎や施設の整備のための費用におそれをなしていたのに対して、これからの幼児はむしろ減るのだ、という見通しのもとに、何とかして設置しようぢやないかとの気運をその点だけでなくもおこしやすくなったといえるからである。

まだほとんど、そのきざしもない地域に対しても、この際いろいろな機会を通じて幼児教育への理解とその必要性の自覚をもたせるよう、努力をしたい。

ことに、これらの場合、今から運動を開始しておく、と、丁度、小学校が昭和三十四年からは、児童数を減少しはじめるの間に合うのである。すなわち、その後はしだいに、教室が空いてくるのである。むろん、小学校の学級数が減ったその全部を幼稚園にふりむけることができるわけではない場合も多いであろうが、いつかは、そしてそのうちのいくつかは、幼稚園にふりかえることができると予想される。その時期をねらって、各小学校に、幼稚園を併設するような運動を、幼

児教育の未発達地方では展開すべきではなからうか。多くは、古ぼけた教室をわけてもらうことになるであろうから、それは質的にすぐれた園とはいえないであろう。しかし、全然ないよりは、良心的な教師がいさえすれば、古ぼけた室と不十分な設備でも、園があるほうがどれだけいいか分らないと私は信じている。一旦できてしまえば、それから先は、園の当事者の努力しだいで、しだいによくなっていくはずである。

しかも、実は日本全体からいえば、この部類に属する地方の方が多いいわねばならない。したがって、こういう大局的な立場にたてばこどもたちの数が減っていくことはかえって幼児教育の振興に絶好の機会となる、といいたいのである。要は、園児の減少、もしくはその予想にあわてふためいたり、悲観してはならない。また、ただ手をこまねいてあきらめるだけでもいけない。これを機会として、一層園の教育を質的に向上させる努力がなければならぬとともに、この機を利用して幼児教育の振興をはかる積極的な対策がうちたてられ、熱心な運動がはじめられなければならない。たしかに困難な試練であるが、これを切り抜けることよってのみ幼児教育の大道がきずかれる。そして、私は、このことが日本の幼児教育の一段の飛躍的な進展をもたらすものであることを固く信ずる。個々の教師たちだけでなく、幼児教育に関するいろいろな団体や組織が、この方向にその努力を結集されることを念願してやまない。